

市長講演

「『人材のサイクル構築』による持続可能な地域社会を目指して～低炭素な環境文化都市づくり～」(牧野光朗・飯田市長)

本日は、少しお時間をいただきまして、私どもの地域で取り組んでおります低炭素な環境文化都市づくり、「人材のサイクル構築」による持続可能な地域社会を目指した取組を発表させていただければと思います。

それでは、スライドを使ってやらせていただきますので、よろしく願いいたします。

最初に、飯田市の紹介でございますが、これは飯田市街と、向こうに見えますのが南アルプスでございます。飯田市は、この東京からですと、新宿からバスで4時間と、どちらかというところ、今のところ東京からの交通利便性がちょっと乏しい地域でございますが、両翼を中央アルプスと南アルプスを抱えておりまして、まさに山の都というところでございます。名古屋からですと、バスで2時間弱、車ですと1時間半ぐらいで行くことができます。

合併をいたしまして、南アルプスの3,000メートル級の山であります聖岳の山頂から天竜川の川面であります300メートルまで全部飯田市と、大変広い面積が市域となりました。人口は約10万8,000人ございまして、高齢化率が27%を超え、国の平均の10年先をいっているというような状況でございます。

標高差が非常にあるということもあるのですが、この地域、山の生活もあれば、里の生活もあり、そして、まちの生活もある、そういったさまざまな多様な生活があるのが飯田市の一つの特徴でございます。

例えば山の生活でございますが、これは合併いたしました上村・下栗地区というところがございますが、南アルプスのふもとに傾斜45度のこういった山斜面のところを開拓して農地にして60戸ほどの方々が住んでいるところがございます。「日本のチロル」というような言われ方もしておりますが、実際にそういうのがあるのを見ていただきますと、今の日本にこんなところがあるのかと、私などは感動をしてしまう次第であります。

そういったところには昔ながらの文化も残っておりまして、遠山郷の霜月祭り、12月に行われておりますが、800年の伝統を持つ祭りが今も絶えることなく毎年行われております。この湯神楽であります、これは宮崎駿監督のアニメの「千と千尋の神隠し」のモチーフにもなったと言われているものでございます。

そうした独自の時を刻む山から里におりてきますと、こうした風景が広がります。棚田があり、そして秋には柿すだれ。私どもの地域の特産であります「市田柿」です。マーケティングにうまく成功いたしましたして、最近、東京ではかなりの値段で売らせていただいておりますが、こうした「市田柿」の柿すだれがあったり、あるいは昔ながらの条里制や豊かだった農村を示す蔵のたたずまい等があるところでもあります。

こうした里におきましては、今、体験教育旅行が非常に盛んで、年間1万5,000人以上の学生・生徒さんがこの地域を訪れて体験教育を受けております。それを受け入れる農家が500戸以上この地域にはありまして、体験教育のメッカとしても知られております。グリーンツーリズム、エコツーリズムですね。

そうした農山村に支えられて、「ハレの場」として発展してきたのが飯田の中心市街地、丘の上と言われるまちであります。このまちの昔ながらのたたずまいも随所に残っているのですが、残念ながら、飯田市のまちの中というのは戦後すぐの大火によりまして80%が消失してしまいました。

これがそうなのですが、ちょうど、この時代、戦後すぐということで、GHQの支配下にあったということもあり、地方都市でGHQがアメリカ型の都市計画を入れた最初のところではないかと言われておりますが、この中心市街地のまちの真ん中に大きな防火帯として、広い道路をつくるということをやったわけであります。その真ん中に当時の中学生が飯田の復興のシンボルとしてリンゴを植えたいという提案をしたということから、この飯田のりんご並木の物語が始まりました。

中学生のこの提案を受けた市役所を初め、まちの大人たちは非常に心配をしました。まだGHQ支配下の飢えの時代に、そんなまちの真ん中にリンゴを植えて育てても、きっと収穫するころには、みんなとられてしまうよと言われたわけであります。それでも、子どもたちの熱意にほだされまして、ここら辺が飯田市らしいところなのですが、それじゃやってみようかということになりました。やってみたら、案の定、最初の収穫の時には、リンゴをほとんどとられてしまった。大人も子どもも非常にがっかりしたわけではありますが、そのニュースがマスコミを通じて全国に流れると、飯田市頑張れ、飯田のりんご並木頑張れという励ましのお言葉をいただいて、それでまたこのりんご並木を頑張って育てようという機運が生まれたと言われております。

そのときに、もうとられたくないから、柵で囲ってしまおうかというような案も出たようですが、やはり飯田市では、この中学生が育てるりんご並木というものを大人たちは大切

に見守っていく、秋の収穫のときに、リンゴが赤々とここに実っても、それをとらないことを誇りにするような、そういった飯田市にしていこうということを誓いまして、今でも、このりんご並木に柵を設けることはしておりません。もう55年以上たつわけでありますが、今でも、このりんご並木はまちの中学生が育てており、飯田のまちの中のシンボルであるだけでなく、飯田の市民の心の中にある、まさに中心的なまちのシンボルとなっております。

りんご並木と人形劇のまちと言われる飯田市は、人形劇でも全国的に注目されておりますが、昨年で30年を迎えました日本最大の人形劇の祭典、「いいだ人形劇フェスタ」には全国あるいは海外から300を超える人形劇団がこの飯田の地に集まってまいります。それを支えておりますのが2,000人を超えるボランティア市民でございまして、飯田は、こういった市民の自主自立の精神が非常に強く、これを「ムトス」の精神と言っておりますが、地域の文化というものを非常に大切にす、そういったものを持っております。

そうした市民の思いにほだされて、東京生まれ、東京育ちの川本喜八郎先生が、NHKの「三国志」で有名な先生の人形たちを飯田に200体寄附してございまして、これが今のまちなかの再開発ビルの一角の人形美術館の中であり、年間5万人ぐらいの「川本」ファン、「三国志」ファンの方々が飯田を訪れるようになっております。

続きまして、今の飯田の取組ということで、少し環境モデル都市に絡むお話をさせていただく前に、持続可能な地域づくりのために、こういった視点で臨んでいるかという話をさせていただきます。

持続可能な視点ということで、まず環境という考え方、そして人という考え方、両方に着眼しているところでございます。

環境の視点が欠かせないことはここで述べるまでもないと思っておりますが、飯田市は平成8年から取り組んだ第4次基本構想・基本計画におきまして、目指す都市像に「環境文化都市」を掲げてまいりました。平成19年には環境文化都市宣言という形で、これを超長期的に目指す都市像として掲げ直させていただいております。また、平成20年には「環境モデル候補都市」ということで一応選定されましたが、先月、おかげさまで、この「候補」の文字がとれまして、「環境モデル都市」ということで、これからアクションプランを進めていく状況となっております。

では、どんな形で環境問題に取り組むべきかということでございますが、多様な主体というものをキーワードにしております。これは、言ってみれば、水平的な連携をとっていくというものでございまして、特に環境産業をどのような形で育成、集積していくかという視点を持つ

ているところであります。

環境産業と言いましても、いわゆる物づくりの、太陽光のセルをつくる三菱電機のような会社でありますとか、あるいはハイブリッド自動車の心臓部でありますセンサーですね、モーターとエンジンの切りかえをする、これがないとハイブリッドになりませんので、そのセンサー部分をつくっている多摩川精機のような会社、こうした会社が飯田にはあるわけですが、当然、こうした会社の産業集積・育成ということにも力を入れているわけです。さらにその連携という形で地域ぐるみ環境ISO研究会がつくられております。特徴は、物づくりに力を入れている会社のみならず、一般の企業も含めて、地域ぐるみで環境ISOに取り組んでいこうという、そういった取組でありまして、行政も一事業所として水平的に参加しております。

また、飯田の特徴は、こうした環境に関連した物づくりという視点だけではなくて、「おひさま進歩」という会社ですが、自然エネルギーの普及をさせる民間主体を育成する会社の育成にも力を入れているのが特徴であります。

また、NPOや市民団体といった方々とも一緒になってネットワークをつくっておりまして、これが「いいだ温暖化防止の環」という形になっておりまして、民間を主体にしたネットワーク、これを行政が後ろから下支えするといった形をとっているところであります。

次に持続可能な視点として力を入れておりますのが人の観点であります。これは今申し上げたような環境の観点の水平的な連携ということに対しますと、いわゆる垂直的な考え方、取組と言ってもいいかもしれません。持続可能な地域社会をつくる主体は人であるわけでありまして、先ほどから出ておりますように、2050年の70%削減といったような目標を達成するためには、当然、その2050年に、そういった環境政策を地域で担うような人材の育成をしておかなければならない。我々だけでは当然できるはずもないところでありまして、そうした主体になります人材あるいは民間をいかに育成するかという観点が不可欠という考え方、これを垂直的な取組として位置づけさせていただいております。

これは、第5次基本構想・基本計画の目指す都市像として「文化経済自立都市」を掲げさせていただいていますが、若い人たちが帰ってこられるような産業をつくる、帰ってきたいと考えるような人をつくる、住み続けたいと感じるような地域をつくる、そうした形で長期的な人材のサイクルをつくることが不可欠であるという考え方があります。

この考え方の背景にありますのは、地域の人材不足が深刻化しているということがございます。飯田市の場合、社会的減というものが非常に顕著に出ておりまして、特に4年制大学を持っていない地域といたしまして、高校を卒業した後、約80%の若い人たちが飯田市を一旦は離

れていってしまう。これまではその中から最終的に戻ってくるのは約40%しかいなかったという問題があります。一旦は離れても再び帰ってくる、こうした人材をいかに多く確保していくかというのが環境を考える上でも不可欠であり、少子・高齢化社会における地方都市としては当然そういうことを最大の課題としてとらえていかなければならないというものでございます。

私たちの地域の課題として、少子・高齢化という観点から、こういったことも考えているわけではありますが、これはまさに地域の総合力が問われるというように思っているわけでありす。

ここに示しておりますように、昔も今も、こうしたりんご並木を育てる中学生が、将来にわたっても確保できなければならないというものでございます。

多様性の保持ということも非常に重要でございまして、先ほど小澤先生のほうからコンパクトシティの考え方が上げられました。この中心市街地、まちなかにおきましては、そうした地域の環境施策を担い得る、主体となり得るような人材を確保していくことが必要ですし、またこの中山間地、今、集落の疲弊が叫ばれているところではありますが、こうした地域におきましても森のエネルギーを担う、そうした人材を確保することも必要だと思っております、まさに山・里・まち、それぞれのライフスタイルが享受できるような、そうした地域であり続けられるようこれからも考えていくことが飯田らしさ、飯田のアイデンティティーの追求だと思っております。

続きまして、「環境文化都市」としての取組ということで、環境モデル都市と言ってもいいのですが、具体的な取組についてご紹介をさせていただきたいと思っております。

新エネ、省エネの地域計画につきましては、ご案内かと思っておりますが、私どもの地域におきましては平成16年9月にこの新エネ省エネ地域計画を立てさせていただき、新エネルギーで5%、省エネルギーで5%、合計10%の削減を目指そうという取組を掲げさせていただいております。

国においてはマイナス6%ということだったと思いますが、私どもの地域ではマイナス10%を目指そうということで、1990年の73.5万トンから2010年までには66万トン余りにしていきたいと、そういった取組を計画としてあげさせていただいております。当然これは行政のみでできるものではありません。市民、事業所、地域をあげての取組ということでもあります。今のところ、まだマイナス2.5%というような実績でございますが、これを何とかマイナス10%まで持っていければという取組を進めております。

民間主体として今注目をされておりますのが、自然エネルギーの普及会社であります「おひさま進歩」でございます。飯田の環境への取組で非常に特徴的なのは、こうした環境政策を担

う主体が民間として出てきている、それも、この民間主体というものを地域の中で育成していくという考え方がとられているところでもあります。この「おひさま進歩エネルギー会社」も社長さんは飯田市の一市民でありまして、その方が中心となって、この「おひさま進歩」を立ち上げ、それを周りのさまざまな主体の皆さん方と連携して、このおひさま進歩のエネルギー普及策を支援しているというものでございます。

おひさま進歩エネルギーの考え方ではありますが、これは市民や法人の方から出資を募りまして、そして事業主体としての「おひさま進歩」があり、そして、行政としては、いわゆる目的外使用という形で保育園や公民館、児童センターといった、こういった屋根を貸すわけです。ここでパートナーシップ協定を結びまして、「おひさま進歩」が太陽光発電システムを設置して、太陽光発電に取り組むというものでございます。

こうした取組を民間主体でやっているということは、当然、行政の区域、枠を超えていくということが特徴でありまして、飯田市からそうした流れをほかの自治体に、これは南信地域といいます、長野県南部のこうした地域に広げていくということも今できてきているところでもあります。全体で平成20年度までで約150カ所の太陽光発電システムの設置を行ってきているところがございます。

それから、もう一つ、飯田のまちづくりの中で欠かせない民間主体がございまして、「飯田まちづくりカンパニー」でございまして、こちらは平成10年に設立された第三セクター、いわゆるTMOであります。

その取組といたしましては、市街地の再開発、ディベロップメント事業を行っておりまして、今、3つの大きな再開発ビルが立ち上がってきております。りんご並木のちょうどわきのところに中心市街地の再開発エリアの設定をいたしまして、ここに第一地区の再開発事業、第二地区の再開発事業、それから民間が主体となってやりました優良建築物、こうしたディベロップメント事業の主体としてTMOが取り組んでおるところであります。

また、こういったディベロッパーとしての機能だけではなくて、さまざまなプロジェクトにも主体的に関わっているのが「まちづくりカンパニー」の特徴であります。例えばミニ再開発事業、あるいは中心市街地が非常に少子・高齢化しているということに対応した福祉サービス事業、あるいは、にぎわい創出のための物販・飲食やイベント・文化事業といったことにも主体的に取り組んできているところでもあります。

環境政策に対する取組につきましては、先ほど小澤先生のほうからも商店街の取組という形でご紹介がありましたが、私どもの地域におきましては「南信州いいむす21」という地域の独

自の環境マネジメントシステムを導入しておりまして、それを中心市街地の商店街にも波及させているというものでございます。

また、優良再開発としてできました堀端のこのビルは、いわゆる外断熱仕様でありまして、環境配慮型の建物として、先ほどお話がありましたように、新しい建物はこうした環境配慮型の建物にしていくということを目指しているところであります。

環境モデル都市として、これからどのように取り組んでいくかということは、まさに今お話ししましたこの地域の中で育成されてきた民間主体が新しくまたその主体になり得るような、そうしたことを考えているわけでありまして。エネルギー会社であります「おひさま進歩」とまちづくり会社であります「飯田まちづくりカンパニー」が、それぞれの特質を生かしまして、それを融合させていこう、そして新しい事業体をつくっていこうということを今考えているところであります。

新たなこの事業体におきましては、再生可能なエネルギーあるいは省エネルギーによる熱供給でありますとか、あるいは環境価値を付加した不動産の販売・普及、あるいは太陽光の市民共同発電といったそうしたことに取り組んでいき、それをやるための資金調達は、こうした「おひさま進歩」が得意としております市民ファンドあるいはグリーン証書等々も考えていければ、それから需給のマッチングをさせるためのまちづくりに合わせたシステムの導入ということで、こうした今まで培ってきたノウハウというものをうまく融合させていくことによって、新しい流れをまた起こしていきたいと考えているところであります。

飯田の環境モデル都市としての全体構造は、こうした大きなコマの形で示されると思っております。一番重要なのは、このコマの下の軸のところでありまして、ここが欠けてしまいますと、このコマはうまく回らず、バランスを崩して、とまってしまうというものであります。一番下のところにありますのが、低炭素で活力あふれる地域社会の形成におけます住民の参画と人材確保、先ほどから申し上げているまさに環境政策に取り組む主体というものをいかに市民参画の中で確保していくか、あるいは外部からの専門家の導入で確保していくかという考え方でございます。そして、それをまちの中でまず実践的に行って、中心市街地における低炭素のまちづくりを進めていこう、さらにそれを周辺部に広げて、全体としてタウンエコエネルギーシステムを構築していこうというものでございます。

その一番中心になります市民参画と人材確保につきましては、これは飯田の最も得意とするところでございまして、さまざまな主体がそれぞれの立場で低炭素社会というものにかかわっていってもらい、そういった仕組みをこれからさらに進めていこうというものでございます。

これまでもエコツーリズムの取組あるいは子育て支援、地産地消、こうしたさまざまな取組を進めてきております。そうした中で、この住民参画と人材確保を進めていこうというものでございます。

次に、中心市街地における低炭素なまちづくりにつきましては、先ほど、このあたりの再開発の話をさせていただきましたが、りんご並木のわきのこうした地区におきまして低炭素なコーポラティブハウスプロジェクトの展開でありますとか、あるいは市街地における熱供給システムの展開といったものを、新しく融合してつくります民間の主体でやっていければというように考えているところでございます。大事なことは、このりんご並木がちゃんとここに維持されていることでございます。

タウンエコエネルギーシステムの構築につきましては、そうした中心市街地の実践というものを、私どもの地域の周辺部は森でありますから、こうした森のエネルギーを利用するプロジェクトまで広げていこうというものでございます。

そうした考え方で飯田市からその周辺部まで、この飯田モデルを面的に展開していこうという考え方をとっております。

環境モデル都市の提案におきましては、30年後の市民生活の様子というものをどのような形で表現できるかということも課題になっておりました。私どもの地域におきますと、こんなような図になるかなと思っております。これは地域の悲願であります。恐らく30年後にリニア新幹線も通って飯田駅ができています。先ほど東京から4時間と申しましたが、そうなると、30分程度で飯田に来れるようになるわけではありますが、そのころには、まさに低炭素な暮らしというものが実現できる、そういったまちにしていきたいと思っております。

ただ、不易流行という言葉がありますように、私が本当に強調しておきたいのは、30年後であろうと、50年後であろうと、この地域の中心にはりんご並木が残っていて、そして代々の中学生がこのりんご並木を世話しているというものでございます。これがまさに飯田のライフスタイルだと私は思っているところであります。

ここで何故これが出てくるかと疑問に思う方もいるかもしれませんが、私の胸につけていますこれでございます。2016年の東京オリンピック招致のシンボルマークは、飯田の特産であります水引をシンボル化していただきました。そういうこともありまして、私も胸につけさせていただいているものでございます。すみません、余談でした。

やはり環境政策を担う人材を将来にわたって確保するためには、どうしても人材のサイクルが重要だと考えていまして、これは飯田が先行実施団体に選ばれておりますが、総務省の定住

自立圏構想におきましても私としては強調させていただいている部分でございます。こうした地方都市から中央に人材が流れていく、そうした流れから、もう一度、地方都市に人材を戻すような仕組みを今後考えていく必要がある。これが将来にわたっての環境政策の担い手の確保にもつながっていくと思っているところであります。

最後に、岸田國士先生の詩をつけてさせていただきました。時間がありませんので、今日は朗読を省略いたしますが、岸田國士先生が疎開したときに、飯田のまちというのはこういうまちなのだということを詩に託してくれたものであります。「老若男女みなそれぞれの 詩と哲学とをもつ町」と唱われている、まさにそうした詩と哲学を持った市民がいるまちとして、これからも持続可能な地域社会を目指していければと考えているところであります。ご清聴ありがとうございました。（拍手）